

Title	2009年度 Keio-Cambridge Joint Seminarに参加して
Sub Title	Report of the Keio-Cambridge joint seminar
Author	
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2009
Jtitle	Newsletter Vol.10, (2009. 12) ,p.3- 3
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002003-00000010-0031

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

2009年度 Keio-Cambridge Joint Seminarに参加して Report of the Keio-Cambridge Joint Seminar

私の Keio-Cambridge Joint Seminar への参加は、一昨年に続き 2 回目となった。2 回のセミナーを通しての印象になるが、このセミナーには和やかな雰囲気があり、発表者同士の距離も非常に近いという印象がある。私自身、発表後にも様々なアドバイスをもらうことが出来た。発表力や英語力を学ぶには、とても貴重な機会であると思う。

このセミナーの良さは、「学問の場」であるケンブリッジの空気を肌で感じられるところにもあると思う。ここでは街中に学問の気風が漂っている。歴史を感じさせるカレッジや最新の研究設備などを見せてもらったが、とくかく圧倒されてしまった。ただそのうちに必ずしも良いことばかりではなく、一長一短だということが分かるようになった。お互いの大学の長所や短所がよりはっきりしてくると、今の自分の研究環境では何が恵まれているのかがとてもよく分かる。

さて、肝心の発表だが、各発表者の分野が少しずつ異なっていたため、前提知識の有無によって聞き方も大分違ってこないかと思われた。限られた時間の中で異なる分野の発表を瞬時に理解する、ということはネイティブであれノンネイティブであれ、そ

う簡単なことではなさそうだ。今後、距離の近さを生かしてさらに活発な議論を行っていくためには、事前にある程度の情報交換を行っておくことが必要かもしれない。

また、今回のセミナーでは研究内容や普段の生活の様子などをケンブリッジ大学の大学院生と話す機会が沢山あった。意見を交換するだけでも大きな刺激になるし、もし一緒に共同研究を行う機会などがあれば、より沢山のものを吸収出来るような気がする。少なくとも、異なる研究環境を体験することで「選択肢」の幅が広がることは間違いないと思う。
(一方井祐子)

This seminar was a great opportunity for graduate students to practically learn academic presentation in English. As the seminar had comfortable and friendly atmospheres, we were able to freely ask questions to presenters. I felt that exchanging some information on each research before the seminar would lead to more interactive debates among participants.

ケンブリッジ大学は今年で創立 800 周年を迎えるそうだ。その伝統に違わず、今回交流した学生さんは皆優秀で、その研究も非常に洗練されていた。特に、初めて耳にする研究のポイントを押さえ、議論を展開する才識には驚いた。それに比べて私たち慶應勢はどうだったろうか。慶應義塾は創立 150 周年。歴史ではまだ遠く及ばないが、研究内容や論理展開、どれをとっても決して見劣りしない高い水準にあると感じた。今回のセミナーは、世界最高峰の研究を肌で感じる非常に貴重かつ有意義な機会であったが、それと同時に慶應義塾の教育、研究の質の高さを改めて認識する場でもあった。

欲を言えば、もう少し相互の情報共有がなされていることが望ましいと思う。私たちは、セミナー中に研究室を見学させていただいたので、彼らが何を、どのような手段で研究しているか、ある程度把握していた。それに対して、ケンブリッジの学生さんは、私たちの研究についての事前情報をあまり持っていなかった。この情報の非対称が議論の中で度々障害となっていたように思う。できることならば、ケンブリッジ大学の学生さんに日本にいらしていただくか、事前にこちらの研究室と研究内容について、詳しく紹介する機会を設ければよいと思う。この点を考慮に入れても、今回のジョイント・セ

ミナーは非常に意義深く、機会があれば是非また参加したい。

(大瀧翔)

In this seminar, I felt that Cambridge University is a truly distinguished educational and research institute. At the same time, I recognized how sophisticated education and research activities in Keio University are. I would like to join the seminar again.



Gachon 大学セミナー報告

Keio-Gachon NRI Seminar

2009年3月18日—20日、韓国 Gachon 大学 Neuroscience Research Institute にて、Keio-Gachon NRI セミナーが行われた。本拠点と同研究所から各 5 名の若手研究者が、ニューロイメージング法を用いた、日頃の研究成果についての発表を行った。本拠点からの発表は機能研究を主とし、Gachon 大学からは形態や技法に関する発表が主であったものの、活発な議論が行われ、今後の研究協力体制が確認された。
(増田早哉子)

Gachon NRI-Keio joint symposium was held at Gachon University in Korea. Five young researchers from each university had active discussions.